

子育て広場

小松 歩・瀧口 優・森山 千賀子・井原 哲人・
佐久間 路子・庭野 晃子・仲本 美央

活動実績の概要

はじめに

白梅子育て広場がスタートしたのは2005年である。以来15年が経過し、学生中心の子育て支援活動は地域に定着した。7つの広場とそこに参加する市民、親子は年間2000人、係わる学生も100人を越え、他大学に例を見ない取り組みとなっている。2019年度も短期大学の保育科から4大の3学科全てにおいて子育て広場に参加している。

1. この1年を振り返って

(1) 経過

- ・ 4月27日(土) あそぼうかい世代間交流子育て広場
- ・ 7月06日(土) あそぼうかい世代間交流子育て広場
- ・ 7月21日(日) あおぞら広場(オープンキャンパスと同時開催)
- ・ 8月10日(土) 浴衣祭り(高齢者・障がい者)
- ・ 8月25日(日) ルネ小平子どもフェスティバル
- ・ 10月06日(日) 日本世代間交流学会第10回大会ワークショップ参加
- ・ 10月19日(土) 白梅祭(ミニあそぼう会、ほっとスペース)
- ・ 10月20日(日) 白梅祭(ミニあそぼう会、ほっとスペース)
- ・ 11月30日(土) あそぼうかい世代間交流子育て広場
- ・ 12月14日(土) 子育て広場シンポジウム

* 以上の他に白梅幼稚園を会場にした月1回の「ひよこの会」、子どもの発達とともに歩む「紅茶

の会」、そして月1回のNPO法人こそだて広場「きらら」の交流、等がある。

例年は教員と学生の懇談会が3回程度、教員と学生、及び卒業生の三者懇談会が2回から3回実施されてきたが、この1年は3月17日にコロナウイルスによる活動自粛の中で部分的に行っただけで、学生との拡大会議は正規の形で行えていない。三者懇談会については6月15日、9月21日に実施した。

「紅茶の会」は佐々名誉教授が、在職中から、月1回土曜日に行ってきたものであるが、この1年も取り組んできた。年が明けてからはコロナウイルスの影響で実施できない3月もあったが、着実に進めてきている。NPO法人「子育てきらら」も月1回火曜日の開催、乳児とその保護者の広場として着実に実施し、学生達も昼休みの短い出会いとかかわりの実感を求めて参加してきた。

(2) 総括

2年生以上の子育て広場GP学生委員会は、この1年間新しく入学し、広場に関心のある学生を組織して指導し、次への引き継ぎを行ってきた。4月のオリエンテーションでは全ての学科において説明会を開催し、4月27日の「あそぼうかい世代間交流子育て広場」において、広場の開催の手本を示した。「地域子育て支援演習」受講者(最終的に73人)は学生委員会の開催するコーナーに入り、運営の仕方を学んでいく。

4月の実施を経て1年生がリーダーになり、7月と11月の広場を開催し、上級生は各コーナーにサポーターとして参加した。なお1年生は夏休み

を挟んで、GP 学生委員会等が企画する様々な活動どれかに参加し、報告レポートを書くことになっている。2019年度は、NPO 体験セミナー、青空広場、浴衣祭り、ルネ小平フェスティバル、白梅祭の企画等が対象になった。

12月には「子育て広場シンポジウム」を開催し、地域や高校生に1年間の活動と今後の方向について提示する。2019年度は白梅の教員がパネリストとして参加した。なお昨年度に続いて小平市の大学が連携して開催している「まちで楽しむ」に参加すると共に、小平市の提示している学生支援事業に応募して補助を獲得している。

1月に入ってから新型コロナウイルスの問題があり、地域での活動ができなくなっており、2020年度をどのようにすすめていくのかの議論が十分にできていない。

新しい執行体制ができるのが前年の2月末、そして新しい体制で4月のオリエンテーションと直後の「あそぼうかい」を乗り切らなければならず、どうしても議論の余地ができないというのが現実である。

(3) 課題

執行メンバーの会議、全体の定例会、そして教員との拡大会議、更には卒業生を含めた三者会議など、議論する場は準備されているが、昼休み等の限られた時間で行わざるを得ないので十分な議論ができていない。とりわけ、親や地域にどのように係わっていくのかを含めた地域作りなどについては議論が不足している。授業時間など学生が地域に係わっていくゆとりができないので、今後どのように機会を作っていくのかが問われている。

世代間交流学会や子育てシンポジウムにおいては、地域や社会などの評価が高かったにもかかわらず、それが学生達の確信になっていないことが伺える。自分たちがやっていることがどのような意味を持っているのか再度議論する必要がある。対応する教員として学生の理解を高めるためにど

うしたらよいか検討しなければならない。

10周年のまとめを作ってから5年が経過し、この間の取り組みについて教員として総括する必要があるが、それぞれが大学内の重要な仕事を担っており、時間が取れないのが悩みである。次年度はぜひその点を改善して組織的に学生に対応したい。またこうした取り組みの報告や理論化をすすめる必要があり、学会等での報告に繋げたい。